（別紙２）

審査の結果の要旨

氏　名　　太田　信宏

本論文は 16～18 世紀の南インド・カルナータカ地方の歴史を、在地社会の構造の転換と王朝権力の政治体制の変化を軸にして分析したものである。史料面においては、カンナダ語の刻文と年代記が駆使されているのが大きな特色となっている。

16～18 世紀のカルナータカ地方では三つの王朝が交替したが、本論文の主要な論点は、マイスール王国中期の 17 世紀後半が重要な転換期であるとするところにある。本論文で太田氏は、カンナダ語史料の精細な分析に基づいて、17 世紀後半以降この地方で、近世的発展ともいうべき現象が見られると同時に、他方ではヒンドゥー的な伝統的価値体系が幅広く浸透したことを示した。最近のインド史研究では 18 世紀再検討論がとなえられ、この世紀に近世的発展が見られたとする見解が有力になりつつある。またカースト制に代表される伝統的価値体系は、イギリス植民地支配の影響下に強化され固定化されたとする見方が広く受け入れられつつある。本論文は、この両方の学説の妥当性に疑問を投げかけ、近世的発展の起源を 17 世紀後半まで遡らせ、また、伝統化の流れが植民地支配期ではなく前近代インドに発するとするものであり、今後の研究の一つの新しい方向性を示していると考えられる。またこのような視角をとることを通じて、強国マイスール王国の抬頭が、18 世紀に出現した君主の個人的資質に帰せられるべきものではなく、17 世紀以来の発展との連続性において捉えられるべきものであることを明らかにしたのも、本論文の貢献である。

本論文では、17 世紀後半を画期とする変化が、在地有力者層の動向、王権の性格、行政・軍事組織のあり方、カーストの再編等の幅広い視点から分析されている。議論の大筋は、（１）15 世紀以降勃興してきた在地有力者層が結集してマイスール王国を樹立するが、17 世紀後半、王都への居住を強制されるなどして、王権に従属するようになった、（２）その結果、在地有力者連合政権としてのマイスール王国の性格は改められ、行政機構の整備、王の常備軍の強化、検地の実施等を通じて集権的政治体制が構築された、（３）弱体化した在地有力者層はマイスール王家を中心としたアラスという新しいジャーティに再編され、宮廷では正統的・バラモン的な価値観が再発見され強化された、というものである。

本論文は、在地社会の構造の分析についてはなお検討すべき余地を残している。また史料の解釈が性急になされている箇所がないわけではない。しかしカルナータカ地方の歴史という、世界的に見ても研究が少ない困難な分野において、現地語史料を駆使して新しい全体的な歴史像を提示し、現在学界で議論の中心になっている論点について新たな視点を導入しようとする意欲作であり、植民地化以前のインド史研究に対して少なくない貢献をするものと考えられる。

よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。